

福岡市埋蔵文化財調査報告書第502集

下月隈天神森遺跡 IV

—天神森遺跡群第4次調査報告—

那珂君休 V

—那珂君休遺跡群第6次調査報告—

1997

福岡市教育委員会

しも つき くま てん じん もり
下月隈天神森遺跡 IV

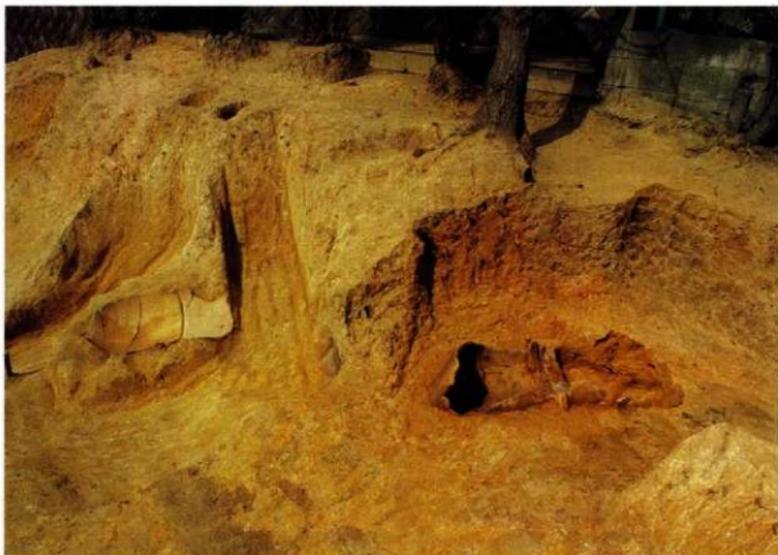
な か くん りゅう
那珂君休 V



天神森遺跡群第4次調査
遺跡略号 STM-4
調査番号 9558
那珂君休遺跡群第6次調査
遺跡略号 NKR-6
調査番号 9605

1997

福岡市教育委員会



巻頭写真1 妻棺墓出土状況



巻頭写真2 調査区全景(北から)

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

本報告による天神森遺跡では弥生時代の羨棺墓地を確認し、那珂君休遺跡では古墳時代の水田跡を検出するなど多くの貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対し、心からの謝意を表します。

平成9年3月14日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例 言

1. 本書は博多区下月隈484番1・2における店舗・事務所建設事業に伴い、福岡市教育委員会が平成7年度（1995年度）に実施した天神森遺跡群第4次調査、及び博多区那珂4丁目311におけるマンション建設に伴い福岡市教育委員会が平成8年度（1996年度）に実施した那珂君休遺跡群第6次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、下川統也、平本恵子、花田則子、小池温子、吉村智子が行った。
3. 遺物の実測は長家、平川敬二、平尾和久が行った。
4. 製図は長家、佐養久美子、戸畑智恵子が行った。
5. 遺構写真は長家が撮影した。
6. 遺物写真は長家、平川が撮影した。
7. 遺構は調査毎に遺構全体で通し番号を付け、遺構の性格を付して呼称している。
8. 遺物番号は調査毎に通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
9. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21'西偏する。
10. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
11. 本書の執筆・編集は長家があたった。

天神森遺跡群第4次調査

遺跡調査番号	9558	遺跡略名	STM-4
調査地番	博多区下月隈484番1・2	分布地図番号	10-0029
工事面積	481.55㎡	調査対象面積	481.55㎡
調査実施面積	203㎡	調査期間	平成8年3月5日～平成8年3月13日

那珂君休遺跡群第6次調査

遺跡調査番号	9605	遺跡略名	NKR-6
調査地番	博多区那珂4丁目311	分布地図番号	024-0086
工事面積	1077㎡	調査対象面積	740㎡
調査実施面積	415㎡	調査期間	平成8年4月8日～平成8年4月20日

天神森遺跡群第4次調査 目次

本文目次

I	はじめに	1
	1. 調査に至る経過	1
	2. 調査体制	1
II	遺跡の立地と環境	2
III	調査の記録	4
	1. 調査概要	4
	2. 遺構と遺物	4
	褒棺墓	4
	土坑墓	9
	土坑	9
	溝	11
	3. 小結	11

挿図目次

第1図	調査区位置図1(1/50,000)	2
第2図	調査区位置図2(1/2,500)	3
第3図	調査区位置図3(1/500)	3
第4図	調査区全体図(1/150)	5
第5図	1号褒棺墓・2号褒棺墓実測図(1/20)	6
第6図	1号褒棺墓・2号褒棺墓遺物実測図(1/8)	7
第7図	5号褒棺墓実測図(1/20)	8
第8図	5号褒棺墓遺物実測図(1/8)	9
第9図	4号土坑墓・3号土坑・7号土坑・8号溝実測図(1/20、1/30)	10
第10図	7号土坑・8号溝遺物実測図(1/3)	11

写真目次

巻頭写真1	褒棺墓出土状況
扉写真	作業風景
写真1	調査区全景(南から)
写真2	1号褒棺墓(西から)
写真3	2号褒棺墓(北から)
写真4	5号褒棺墓(南から)
写真5	4号土坑墓(東から)
写真6	7号土坑(西から)
写真7	出土遺物

那珂君休遺跡群第6次調査 目次

本文目次

I	はじめに	15
	1. 調査に至る経過	15
	2. 調査体制	15
II	調査の記録	15
	1. 調査概要	15
	2. 調査区土層	18
	3. 水田跡	20
	4. 溝	21
	5. 小結	21

挿図目次

第1図	調査区位置図1 (1/25,000)	16
第2図	調査区位置図2 (1/5,000)	17
第3図	調査区位置図3 (1/500)	18
第4図	調査区全体図 (1/100)	折り込み
第5図	調査区土層図 (1/80)	19
第6図	水田出土遺物図 (1/2)	20

写真目次

巻頭写真2	調査区全景(北から)
扉写真	作業風景
写真1	調査区全景1(北から)
写真2	調査区全景2(北から)
写真3	西壁土層(南から)
写真4	東壁土層(南西から)
写真5	東壁南側土層(西から)
写真6	東壁北端部土層(西から)
写真7	西壁南端土層(東から)
写真8	南壁西側土層(北から)
写真9	溝1土層(北から)

天神森遺跡群第4次調査



I はじめに

1. 調査に至る経過

九州の中心的都市の一つである福岡市では、都市規模の拡大に伴い都心部から市街地周辺部に開発が広がっている。今回の調査が行われた博多区下月隈地区についてもその例外ではなく、ユニバーシアードを一つの契機とした月隈丘陵の開発や福岡空港線・高木下月隈線等の道路網の整備が行われているところである。

本物件は博多区下月隈484番1・2において賃貸用店舗・事務所建設が計画されるのに先立ち、平成7年12月11日付けで昭和観光開発株式会社代表取締役森定雄氏より、埋蔵文化財課に対して埋蔵文化財事前審査願が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である天神森遺跡に含まれておりと共に隣接する福岡空港線建設時に発掘調査を行っている地点であった。この為平成7年12月26日及び平成8年1月10日の2回に渡り試掘調査を行った。この結果弥生時代に位置づけられる土坑墓等を確認した。これを受け埋蔵文化財の取扱について協議を行った結果、切土による破壊が避けられないため発掘調査を行うこととなった。

調査は平成8年3月5日～平成8年3月13日の期間で行われた。また調査対象面積は481.55㎡で調査面積は203㎡である。

なお調査を行うにあたりましては、土地所有者である光安政一氏及び昭和観光開発株式会社にはご理解とご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体	光安政一
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 第2係長 山口謙治
調査庶務	第1係 西田結香
調査担当	長家伸
調査作業	下川航也 小川博 鹿毛賢次郎 小路丸嘉人 村本義夫 藤田栄 池聖子 大音輝子 岸原千秋 草場恵子 小池温子 小路丸良江 指原始子 寺園恵美子 中村幸子 永田優子 花山則子 平木恵子 山野妙子 吉村智子
整理作業	太田次子 戸畑智恵子 石谷香代子 星野明子 三苫裕子

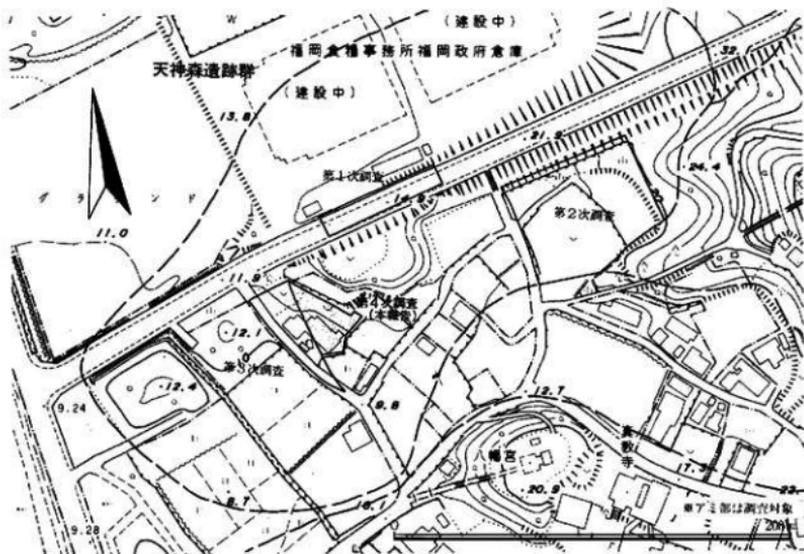
II 遺跡の立地と環境

天神森遺跡群は福岡市の東端を画する月隈丘陵西側斜面の端部に位置する。月隈丘陵は四王寺山から延びる丘陵の一つで福岡平野と粕屋平野を区画し丘陵上には金隈遺跡、宝満尾遺跡、久保岡遺跡、赤穂ノ浦遺跡、大谷遺跡、席田青木遺跡等弥生時代を中心とする遺跡群が濃密に分布し、さらに丘陵西側に展開する沖積平野部には雀居遺跡下月隈C遺跡が知られている。これらの遺跡群中丘陵上に分布する遺跡群では甕棺墓を主体とした埋葬遺構が多くみられる。金隈遺跡では前期～後期、席田青木遺跡では中期前半以降の甕棺墓・土坑墓・木棺墓等がそれぞれ300基・160基以上検出されている。また金隈遺跡では南海産の貝輪が出土している。宝満尾遺跡では土坑墓に小型舶載鏡が副葬されていた。また久保岡遺跡・雀居遺跡では弥生時代に位置づけられる大型建物が確認されている。これら丘陵～沖積地に展開する遺跡群は「奴国」の範囲に含まれ、この中での特点的な集落を構成するものと考えられる。

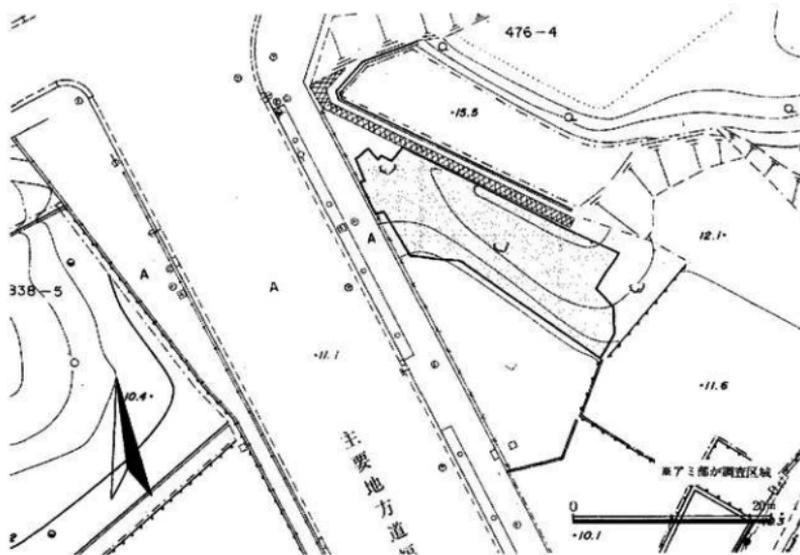
天神森遺跡群では現在までに本報告分を含め4次にわたる発掘調査が行われている。1次調査は市道建設にともなう調査で、弥生時代中期～後期の土坑墓19基、5世紀代の古墳が確認されている。2次調査は公園建設にともなうもので、弥生時代に属する甕棺墓・土坑墓各1基のほか8～9世紀代の土坑1基、中世の掘立柱建物14棟・井戸・土坑を検出している。2次調査地点は浅い谷間に位置し、中世の遺構が多く確認されており注目される。3次調査は4次調査に隣接する地点で、都市計画道路建設にともなう調査である。ここでは弥生時代前期～中期の甕棺墓44基・木棺墓24基・土坑、古代～中世の土坑・建物を確認している。



第1図 調査区位置図1 (1/50,000)



第2図 調査区位置図2 (1/2,500)



第3図 調査区位置図3 (1/500)

III 調査の記録

1. 調査概要

調査地点は月隈丘陵から西側に派生する丘陵端部に位置する。調査前現況は宅地で丘陵部分は庭を造り出す時点で大きく削平を受けていた。このため対象地は丘陵が大きく3段にカットされていた。最下段は宅地造成時に1m以上の盛土が行われており試掘時にも遺構は確認していないため調査対象からは外している。上段～中段は地山の花崗岩・パイラン土が露出している状態で、中段平坦面～段落先端部分には10～30cmの表土が乗っていた。隣接する3次調査地点で弥生時代の甕棺墓・土坑墓・木棺墓が丘陵裾部を取り巻くように検出されており、本調査地点でも関連遺構の存在が想定されていた。

調査対象とした上段～中段部分は造成・植樹のため遺構面の痛みが大きかった。検出遺構は甕棺3基、土坑墓（木棺墓の可能性もあるが明確でないため報告では土坑墓とする）1基、その他土坑・溝である。甕棺墓は上段の斜面からでいずれも大きな削平を受けていた。また土坑・溝は古墳時代～中世に位置づけられる。

2. 遺構と遺物

甕棺墓

甕棺墓は斜面等高線に平行するように大型棺を3基検出した。いずれも斜面を造成する際の擾乱で大きく削平を受けている。表土・擾乱中からも甕棺の破片が多く出土しており、実際にはこれ以上の甕棺が埋葬されていたことを伺うことが出来る。

1号甕棺墓（第5・6図）

斜面の削平により下甕の底部が残存するのみである。主軸を約 $N-81^{\circ}-W$ にとり、埋置角度はおおよそ 27° 程度である。また1号甕棺墓は2号甕棺墓掘り方内に埋置されており、切り合い関係から2号甕棺墓に後出するものである。

甕棺

1は下甕の底部破片である。外底は平坦で厚さ2.5cmである。底径12.5cm、残存器高20cmを測る。器表面は荒れて調整は不明であるが、内面はナデを行う。胎土には石英砂粒を多く含み、灰黄褐色を呈する。

2号甕棺墓（第5・6図）

下甕の下半を擾乱により欠失している。墓坑掘り方は長円形をなすものと考えられ幅1.9mを測る。また上甕の下部を深さ20cm程2段に掘り込む。下甕に上甕を差し込んで埋置するが、上甕の一部は口縁部を欠失している。主軸方向を $N-82^{\circ}-E$ に取り、埋置角度は 11° で上甕がやや低くなる。

上甕

2は器高70.2cm、口径59.2cmを測る。口縁部上端に粘土帯を貼り付け、端面はほぼ平坦である。口縁部外面下部部に刻目を施す。頸部及び胴部最大径部分に3条の沈線をそれぞれ巡らしている。調整は外面は不明、内面は頸部に横方向の刷毛を行い、以下は指押え・ナデによる。

下甕

3は器高79cm、口径64cmを測る。口縁部上端に粘土帯を貼り付け、端面はやや外傾する。底面は剥落の影響も考えられるがやや上げ底気味となる。器表面の剥落・荒れが著しく、口縁外面の刻目・胴部の沈線は不明瞭に成っている。調整は内面頸部やや下方まで横方向の刷毛を行い、以下は指おさえ・ナデによる。

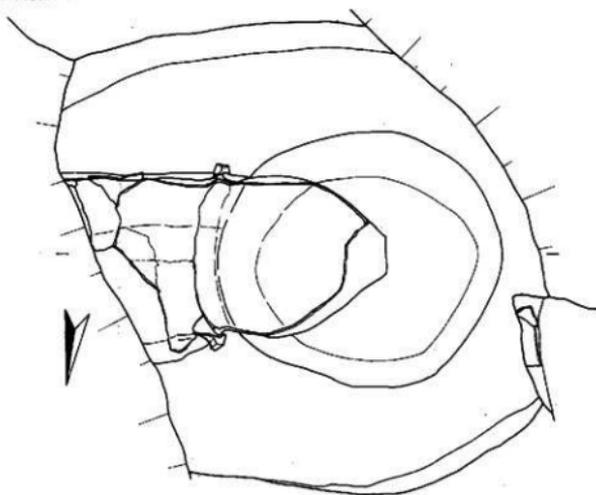
1号墓棺墓



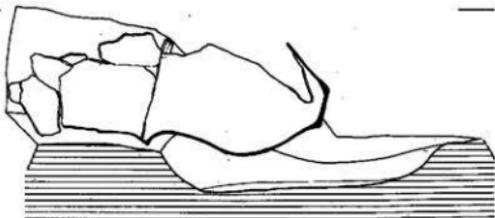
H=13.5m



2号墓棺墓

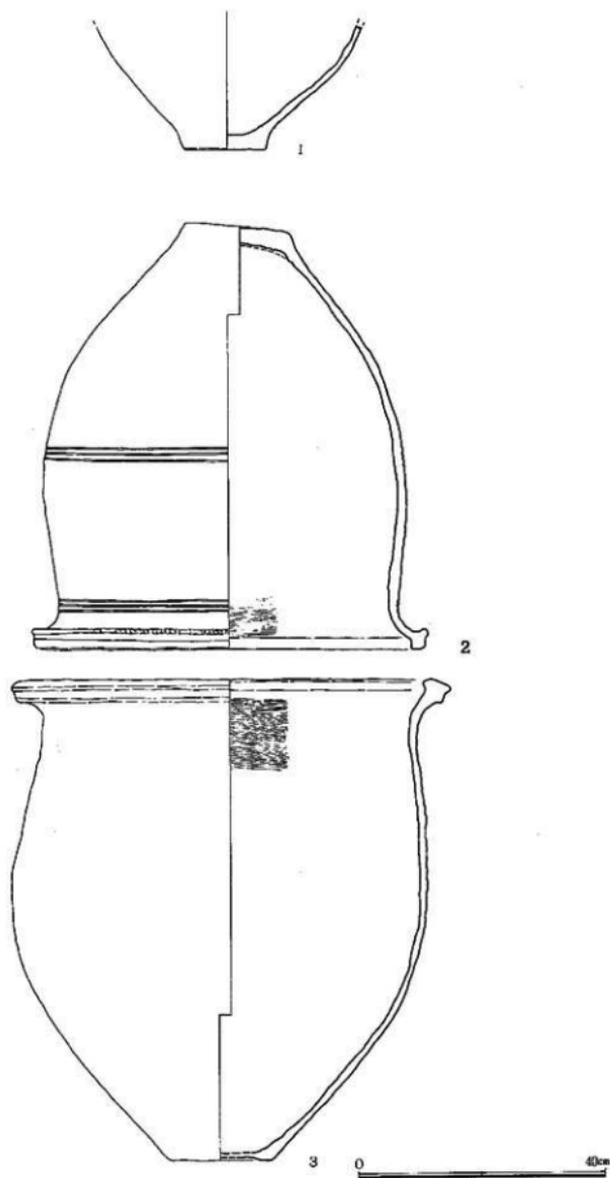


H=13.5m



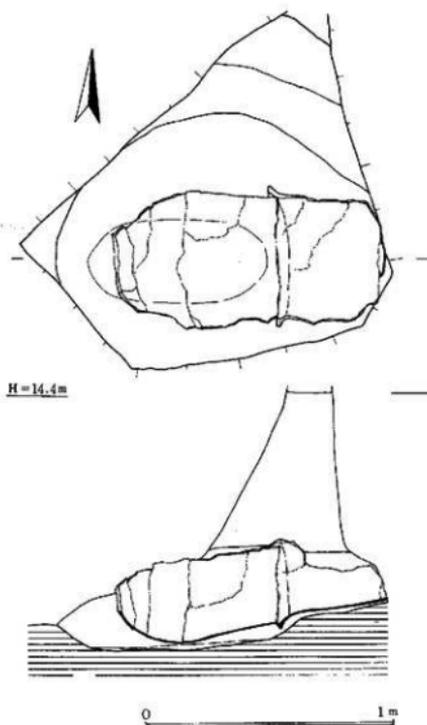
0 1m

第5图 1号墓棺墓·2号墓棺墓平面图(1/20)



第6图 1号寝棺墓・2号寝棺墓遺物実測図(1/8)

5号喪棺墓



第7図 5号喪棺墓実測図(1/20)

5号甕棺墓 (第7・8図)

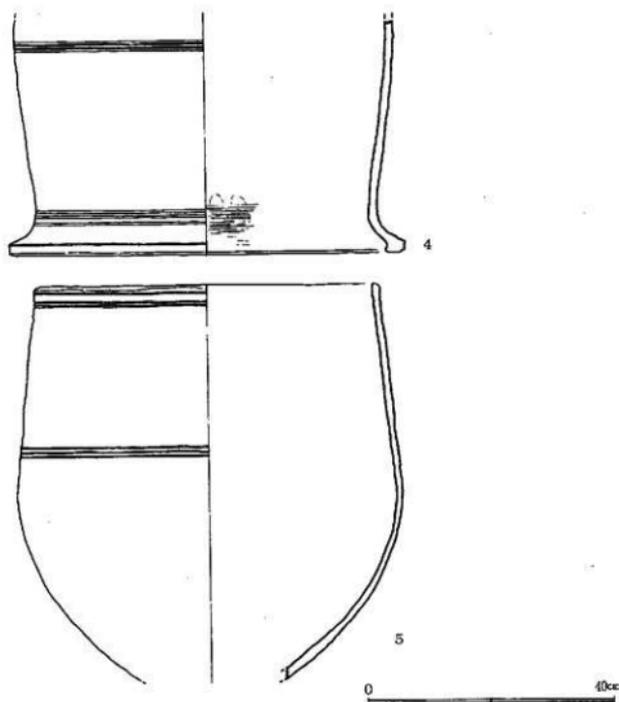
攪乱により上半及び周辺部分を大きく欠失する。下甕の口縁部を打ち欠き、上甕に差し込んで埋置している。また結合部分には目張りの粘土が貼付されている。主軸方向は $N-86^{\circ}-E$ をとり、埋置角度は約 7° である。

上甕

4は攪乱により下半部を欠失する。粘土帯を貼り付けた口縁部の上面は平坦に仕上げる。口径58cm、残存器高38.5cmを測る。頸部及び胴部最大径部分には3条の沈線をそれぞれ巡らしている。内面は口縁下9cmまでは横方向の刷毛を行い、以下には指押え・ナデによる調整を行う。

下甕

5は口縁部を打ち欠き、底部は攪乱により欠失する。上面径53.6cmを測り、頸部及び胴部最大径よりやや上方にそれぞれ横方向の線を有する。器面の剝落が進み調整は不明瞭であるが、内面には指頭痕が残っている。



第8図 5号墓棺墓造物実測図(1/8)

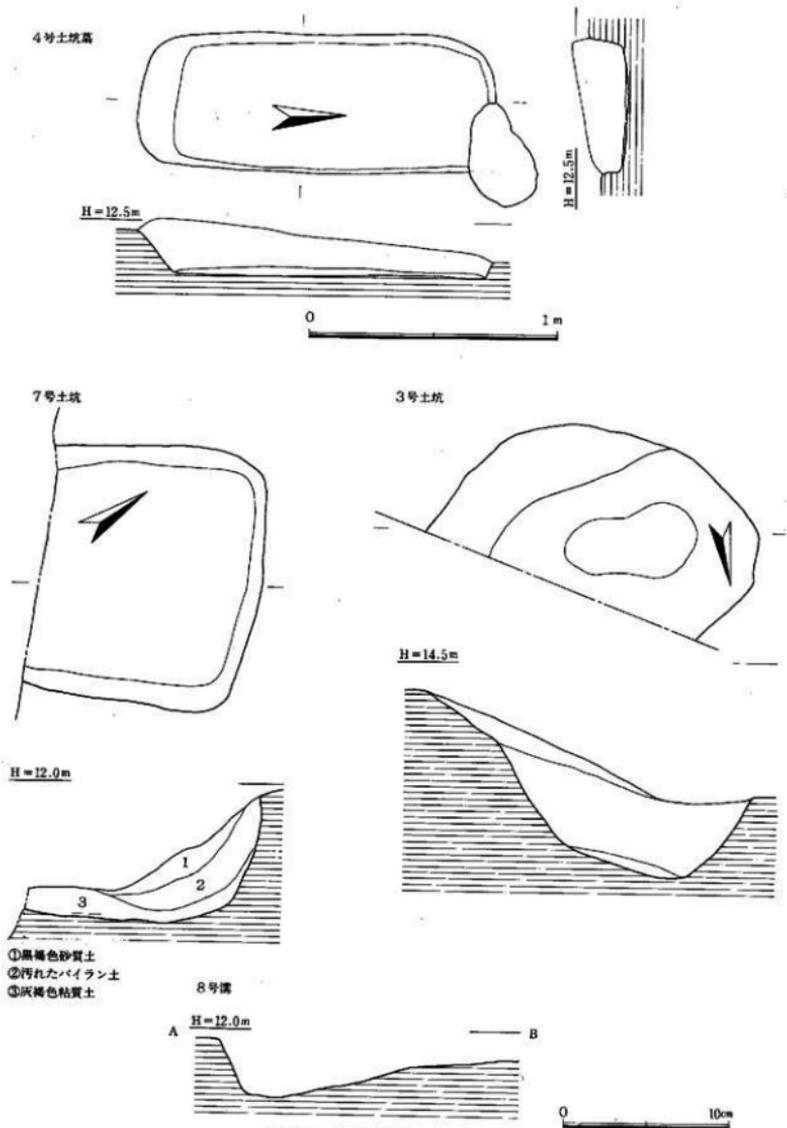
土坑墓

4号土坑墓 (第9図)

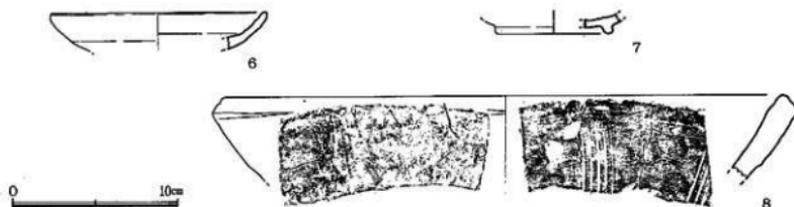
調査区北端で検出した。この部分では中段が広がり、調査区内では唯一の緩やかな平坦面をなす所である。埋土は灰黄褐色砂質土である。平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.45m・短軸0.55m、深さ20cmを測る。主軸をN-3°-Eにとる。小口側壁は比較的緩やかに立ち上がり、長辺側は直立に近く立ち上がり横断面箱形を呈する。底面はほぼ平坦で、中央が僅かに低くなっている。出土遺物はなく造構の性格・時期等は不詳であるが、3次調査成果と関連付けるならば、弥生時代前期に属する土坑墓の可能性が考えられる。また木棺墓の基底部分の可能性もあるが確証が無いため今回は土坑墓として報告する。

土坑

土坑は数基検出しているが、多くから近現代陶磁器・瓦が出土しており新しい時期の掘削がほとんどである。しかしこれらに混じって、土師器坏・皿、須恵器甕、青磁、白磁等の破片が少量出土しており、対象地域及び周辺に古墳時代～中世の遺構が存在した可能性が考えられる。



第9図 4号土坑墓・3号土坑・7号土坑・8号溝実測図(1/20、1/30)



第10図 7号土坑・8号溝遺物実測図(1/3)

3号土坑 (第9図)

上段西端で検出する。北側を調査区外に延ばすが、平面は長軸1m、短軸1.5mの長円形に復元できる。また断面は東壁が2断に掘り込まれ、底面は長軸80cmを測る。弥生時代中期後半～古墳時代に属する遺物が出土している。形状・位置から襲撃の抜き跡の可能性も考えられる。

7号土坑 (第9図)

中段から下段への斜面上で検出する。西側を削平により欠失するが、南北長1.6m、東西長1.3m以上を測る長方形～方形の土坑である。東側壁は高さ70cmを測り、壁はやや丸みを帯び直立する。底面は平坦である。1・2層から土師器、青磁（龍泉窯系鎗連弁碗）、瓦器碗、滑石製品片の一部等の遺物が僅かに出土する。

出土遺物 (第10図)

6は青磁小碗口縁部破片である。復元口径13cmを測る。文様はなく、胎土は灰白色、釉調は淡いオリーブ色である。

溝

8号溝 (第9図)

中段北半で検出する。南側は丘陵の法尻にそって掘削されている。6号土坑以南では認められないが削平されたであろう。南側は緩やかに立ち上がるが、北側は直立に近い立ち上がりを示す。埋土は淡褐色粘質土である。青磁、土師器皿・碗・すり鉢等が出土している。

出土遺物 (第10図)

7は瓦器碗底部である。1/4程度の破片で、磨滅が著しく調整不明である。8は土師質のすり鉢である。淡赤褐色を呈し、胎土には僅かに石英微砂粒を含む。調整は外面が横刷毛の後ナデを行い、内面は横刷毛ののちに4本1単位の擦り目を入れている。

3. 小結

今回の調査地点は削平が激しい事もあって埋葬遺構については襲撃3基、土坑墓1基にとどまった。しかし隣接する3次調査地点の結果からも、丘陵端部を取り巻くように埋葬遺構が検出されており、検出数を上回る遺構が存在していたことは確実である。このことは擾乱内から出土する多くの襲撃破片からも伺うことが出来る。月隈丘陵上にこのような墳墓群が更に存在していることも考えられ、今後の調査事例の増加により明らかと成るであろう。

また中世に位置づけられる遺構が検出され、2次調査に関連して該期の遺構が谷間だけでなく丘陵上にも広がることが確認された。



写真1 調査区全景(南から)

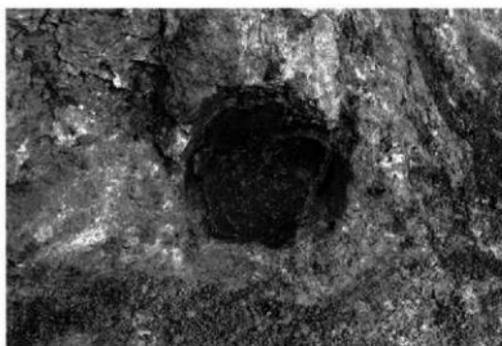


写真2 1号妻棺墓(西から)



写真3 2号妻棺墓(北から)



写真4 5号妻棺墓(南から)

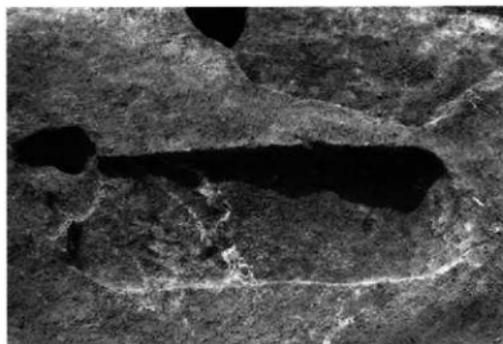


写真5 4号土坑墓(東から)



写真6 7号土坑(西から)

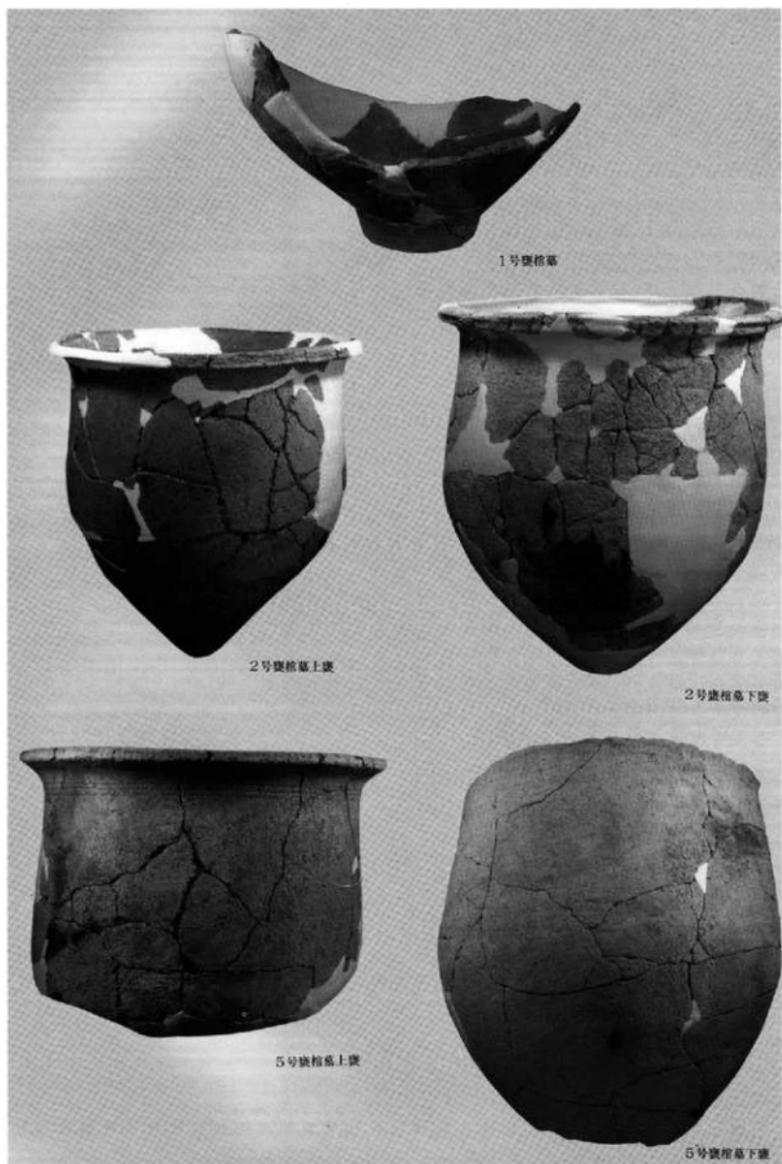


写真7 出土遗物

那珂君休遺跡群第6次調査



原写真 作業風景

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成7年12月7日付けで吉村文好氏より埋蔵文化財課宛に博多区那珂4丁目31の物件1,077㎡について埋蔵文化財事前審査願が提出された。なおこの物件については後に三愛建物株式会社代表取締役草場春次氏により平成8年3月5日付けで事前審査願が再提出された（事前審査番号7-2-510）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂君休遠跡群に含まれているため、これを受けて埋蔵文化財課では平成7年12月18日に試掘調査を行った。この結果対象地全体で水田面が確認できたため、遺構の保存についての協議を行った。協議の結果、現況での保存は困難であるため、発掘調査を行い記録保存を測ることで合意し委託契約を締結した。

発掘調査は平成8年4月8日～平成8年4月20日の期間で行った。調査対象地は申請地の内マンションの建設される740㎡とした。また実際の調査面積は廃土置場等の関係で415㎡である。

調査に当たっては三愛建物株式会社を始めとして、地元弥生公民館・弥生小学校にもご理解を頂き協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 三愛建物株式会社

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 第2係長 山口讓治

調査庶務 第1係 西田結香

調査担当 第2係 長家伸

調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺園恵美子 小川博 村本義夫 小路丸嘉人 平本恵子 永田優子
指原始子 花田則子 池聖子 大音輝子 吉村智子 小池温子 中村幸子 増田ゆかり
草場恵子 岸原千秋 小路丸良江 山野妙子 今林加津江

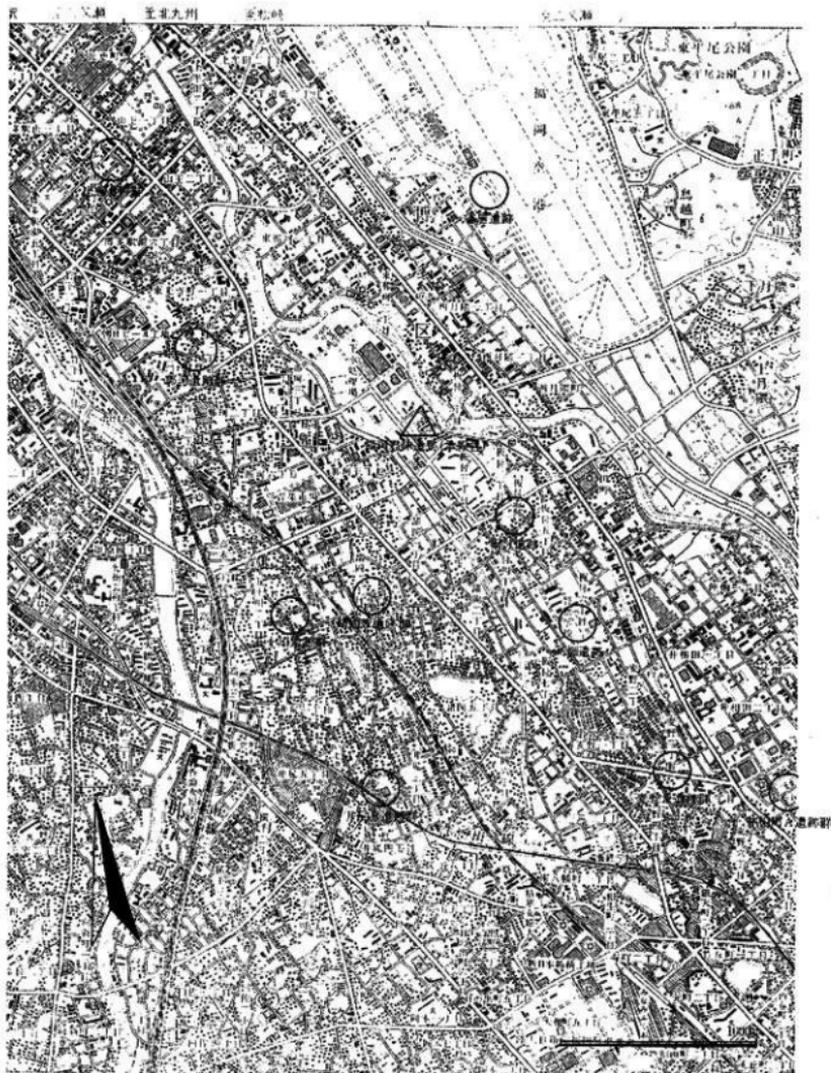
整理作業 三苫裕子

II 調査の記録

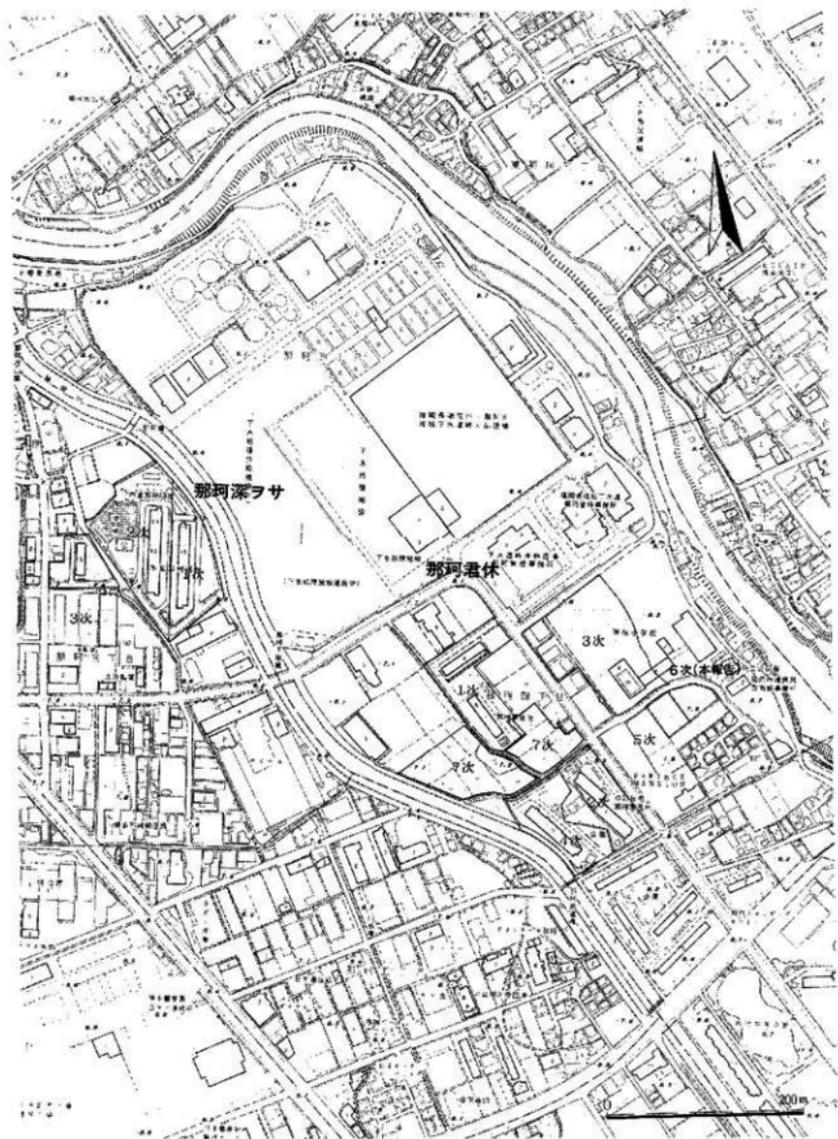
1. 調査概要

調査地点の北側に位置する3次調査地点（現市立弥生小学校）の調査成果によると、河川氾濫に因るものと考えられる砂層を除去した所で検出した上層水田址（中世）及び下層水田址（古墳時代）2面の水田が平面的に捉えられている。また調査区北半では砂層中で中層遺構面として溝が検出されている。また弥生時代後期の井堰とともに土層観察から不明確ながらも弥生時代水田が営まれた可能性が指摘されている。

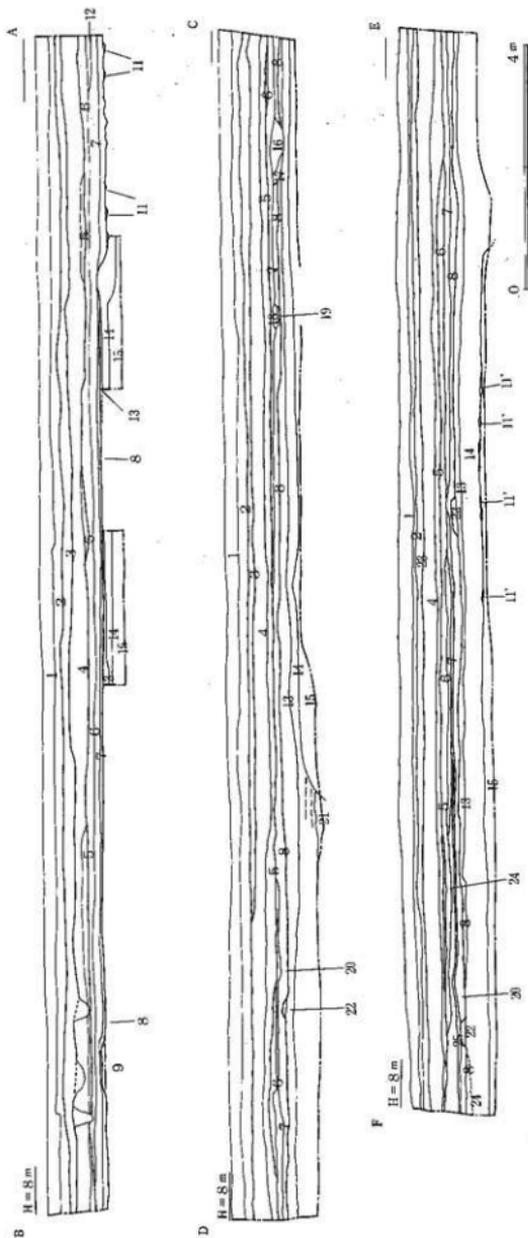
本調査では隣接する3次・5次調査（本年度報告書刊行）の成果を参考にして重機による表土剥ぎを行った。しかし上層水田対応する水田面は調査区内では不明瞭で平面的に捉えることは出来なかった。このためここで下層水田址に対応する水田面の検出を行った。その結果表土下約1mの灰黄褐色粘質土（13層）上面で10枚の水田を検出した。また遺物は水田埋土及び水田上層の堆積上から細片のみがバケース1箱分出土した。



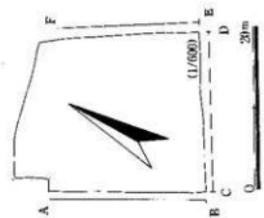
第1图 调查区位置图1 (1/25,000)



第2図 調査区位置図2 (1/5,000)



- 1. 灰褐色土(現代耕作土)
- 2. 黄褐色土(床土)
- 3. 灰質セシルト(粗砂混じり)
- 4. 灰褐色粘板土(厚く安定的)
- 5. 4層は粗砂を多くまじえる
- 6. やや細かい粘板土(即水山床土)
- 7. 粘土色粘板土
- 8. 暗褐色土(粗砂を多くまじえる、やや基体層がら)
- 9. 暗褐色土(=22層): 暗砂
- 10. 白色粗砂+灰色粘質土混成
- 11. 粗砂(=12層)
- 11'. D-E間の11'層は足跡かどうか不明
- 12. 褐色粗砂
- 13. 灰黄褐色土
- 14. 灰褐色粘質土(北側では13層がなくは暗黄砂)
- 15. 黄色土(土器なし、自體の小柱有)
- 16. 黄褐色アロクックを含む黄褐色土 薄く埋土
- 17. 淡黄色土
- 18. 淡灰色粘質土
- 19. 18層に黄褐色アロクック混じる
- 20. 黄色土
- 21. 粗砂
- 22. 暗褐色土(暗砂)
- 23. 灰白色粘質土
- 24. 粗砂
- 25. 灰褐色粗砂(閉鎖区東半に広がる=15層)
- 26. 25層より黄味強く粗砂多い



第5図 調査区上層区(1/80)

3. 水田跡

表土下約1mで10枚の水田跡を検出した。標高7m～6.7mを測り、3次調査下層水田址より30cm～40cm程水田面が高くなっている。水田の区画は調査区北半は長方形に近い形態を示し、比較的小規模な区画が成されている。これに比べ南半水田7～水田10は水田7に示されるように方形に近く大規模な区画が成されていると考えられる。また畦は現況の区画にほぼ平行している。北側3次調査地点での下層水田址の区画は本調査区に近い南半部分では不整形の小規模水田が鱗状に広がり、畦畔の方向は略南北方向を示している。このような区画・方向の違いは旧河川等の旧地形に規制されたものと考えられる。

水田面レベルは南東から北西方向に向かって低くなり水田1～水田4のなかでも水田1が最も低くなっている。3次調査においても南～南西方向に水田が低くなっており今回の結果もこれに整合するものである。水口は3ヶ所で見出された。いずれも畦畔が途切れていることにより確認できたもので、これにともなう施設の有無は明らかでない。幅は60cm～80cmで、水の流れ込みによる落ち込みは見られなかった。

水田には足跡が残されていたが、水田1を除いては大半の水田では全体に足跡が広がっているものややぶらな状態であり作業動線は不明である。しかし畦の周囲では比較的多くの足跡が検出された。

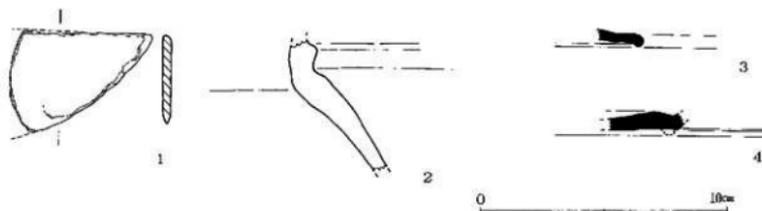
畦畔は水田1及び2に伴うものは削りだしに因るものであるが、これ以外は粘質土を盛ることにより成形している。畦は下幅60cm～100cm、上幅40cm～50cm、高さ3cm～10cmを測り、断面は上部がやや丸みを持った藩鋤状を呈する。また水田9から7にかけて検出水田埋土上面に形成された畦が1本検出されている(18・19層)が、これに対応するその他の畦畔は確認していない。

遺物は水田面・水田埋土からはほとんど出土していないが、水田3・6・7の畦が交差する部分で、畦内及び水田面状面から細片が少量まとまって出土している。この他は水田埋土から細片が数点と埋土上層上(4層が大半)から土器片が出土している。

出土遺物(第6図)

1は水田9埋土出土の石包丁である。頁岩製で磨滅・剝落が進んでいる。現状で厚さ3mmを測る。2は水田3出土の壺破片である。この他にも同一個体と考えられる小破片が数点まとまるが接合には至らなかった。頸部に突帯を有す。磨滅が進み調整は不明瞭であるが内面ナデ、外面ミガキを行っている。胎土には雲母・石英砂粒を含んでいる。色調淡赤褐色を呈する。

3・4は4層出土土器である。3は須恵器環蓋口縁端部である。端面を嘴状に折り曲げ、丸く納めている。4は須恵器高台付き環破片である。高台部分は端部が欠失している。



第6図 水田出土遺物図(1/2)

4. 溝

溝1

水田3・6内に畦畔を切って伸びる溝を1条検出した。検出長12mで北側で立ち上がり消滅する。最大幅1.1m、深さ20cmで、底面は緩く湾曲し断面皿状を呈する（土層図参照、16・17層）。7層が上面にかぶっており、中世以前の掘削であろう。遺物は細片のみで細かな時期は不詳である。

5. 小結

本調査区は調査面積が狭いうえに水田上面に明確な砂層が堆積していなかった事もあり不明確な点も多いが、周辺の調査事例と考え合わせると、古墳時代に属する水田遺構の広がりか確認できたことが成果として上げることが出来る。生産遺構の性格上遺物の出土が極めて少なく時期決定は不安定なものにならざるを得ないが、水田標高・基盤層からみて本調査による水田遺構は3次調査の下層水田址に対応するものと考えられ、これによれば5世紀代に営まれた水田とすることが出来る。更に4層出土土器から古墳時代以降古代にも水田が営まれていたことが考えられる。

またこれ以前の弥生時代に位置づけられる水田については今回も確認することができなかった。今後の調査に期待したい。



写真1 調査区全景1(北から)



写真2 調査区全景2(北から)



写真3 西壁土層(南から)



写真4 東壁土層(南西から)

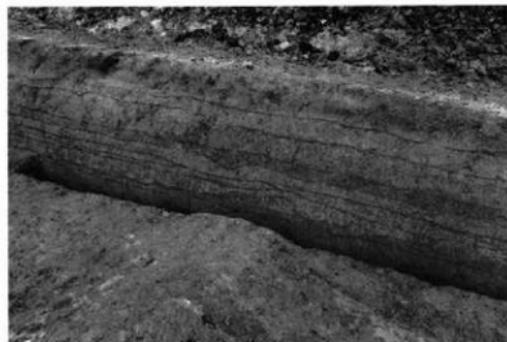


写真5 東壁南側土層(西から)



写真6 東壁北端部土層(西から)



写真7 西壁南端土層(東から)



写真8 南壁西側土層(北から)



写真9 溝1土層(北から)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第502集

下月隈天神森遺跡Ⅳ
那珂君休Ⅴ

1997. 3. 14

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 松影堂印刷株式会社
福岡市博多区吉塚5丁目13-40
